

村井実著「三論或問」を読む

- 「人間はみな善く生きようとしている」という人間観を考える -

1. 教育はほんらい親と子の間で、あるいは人と人との間で始まった。

国家としての教育は重要ではあっても、人間の教育としてはいわば捕捉や付け足しの意味をもつものでしかない。 P.11

2. 人間はすべて、見かけや性格や生まれつきの「才」や「能」などについては千採万様でありながら、一様に「善く生きよう」としている。

それが、生物としての人間の、持ち前のすばらしい特質だ。

この特質は、個々人の別に関わらないと同時に、白色人種や有色人種などという人種の別にもまったく関わるわけではない。

人間はすべてその本性にしたがって、ほんらいどこまでも「善い」生き方を探り、その実現に努めていくはずのものだ。 P.12 ~ 13

村井実著「三論或問」東洋館出版 2006年5月1日刊

- 2006年10月4日記 -